
私立異世界学園

モブにもなれない人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私立異世界学園

【Nコード】

N5679Z

【作者名】

モブにもなれない人

【あらすじ】

短編「異世界救ったとか言うけどさ」の続編です。前作は読まなくても平気です。主人公の親友は勇者となって帰ってきた。けれど帰還の瞬間を見ちゃった主人公は親友ごと連れ去られ、どこかにある島の学園へと通うことになる。そこはファンタジーもビックリな、様々な世界の人達が通うトンデモ学園だった！

プロローグ

「じゃあ転校生くん、入って来て」

とある日、前後にある教室の入り口。その前の入り口から彼は足を踏み入れた。ふと、彼は自分の喉がカラカラに渴いている事に気付く。教室と廊下を明確に区別するドアの敷居を跨ぐためにと動かした足は微かに震えていて。

「――勇者」って言っても所詮は人間だよな

そんな自分の様子に彼は苦笑いを浮かべる。死と隣合わせの旅を2年に渡って続け、その旅の果てには今まで戦ってきた誰よりも強い魔王との戦い。今までの戦闘が兎戯に等しい程苦しい死闘を繰り返して、3人の仲間ともぎ取った勝利。魔王を倒した事よりも生き残った喜びの方が大きかった……。

無意識に過去を思い返していたため動かない彼に、怪訝な表情を浮かべる担任となるであろう先生。それから浴びせられる視線に、彼は我に帰ると視線で謝りながら身体を動かす。

あの日、魔王討伐を終えて無事に元の世界へと戻ってきた彼を待っていたのは黒い服に身を包んだ関わってはいけないような男達だった。訳がわからぬ内に拉致され、目隠しされた拳げ句何かを嗅がされて意識を奪われ、気がついた時にはどこかもわからぬ島の学校っぽいところだった。そこで年端も行かぬ少女に提案される。

異世界から帰ってきた人や異世界から迷い込んできた人達だけが通う学校がここにはあるから通わないか、と。

旅先で手に入れた剣あいはつは手放したくなかったし、魔法を隠す必要もない。何より自分は世界を救った勇者なのだから。

そして彼は教室に入る。約40人程の生徒が座っており、その全員。つまり80の目から視線を一身に受ける。凱旋パレードではこれの数十倍の視線を浴びたのに。それなのに彼は緊張し、かすかに震えた。

自分は勇者、この程度で震えてどうするか！

心の中で自身を一喝。震えを抑えた彼はきつ、と教室内を見据えて勢い良く腹から声を出す。

「城内じやうちん 明あき！ 異世界ユードで魔王を倒した勇者です！ よろしく！」

決まった。可もなく不可もなくではあるが、どもらずにはつきりと言つことが出来た。

救世の勇者。皆も尊敬するような目で見るか、憧れを抱くだろう……と、彼は思っていた。

よろしくの一言と共に下げた頭を上げるまでは。

教室内を巡る空気は一言で表すならば倦厭だった。例えるならば小さな地震に対するような。来た一瞬は興味惹かれるものの、すぐ

取るに足らない事だとわかった時のような「なんだまたか」の空気。城内明はそれに酷く困惑し、思考に空白が生まれて動きが止まっていた。

(あーあ、かわいそうに)

そして奇妙な膠着状態の中、窓側最右列最後尾。そこに座る特徴がないのが特徴とも言えるべき中肉中背の青年が同情を顔に浮かべながら城内明を一瞥した。彼にとっては二年前の親友を“また”見ている気分になったため、同じ反応を浴びた者同土——厳密にはこの青年が浴びた訳ではない——が、複雑な心境である。

と、その青年の前から隠す気がないとわかる程大きなため息が漏れた。青年はこれも毎度の事だ、と気にしない。この空気に晒された事のある青年の親友だったからだ。約二年前、青年と共にこの学校へ編入した青年の親友は黒板前に立つ城内明と同じく、異世界を救った勇者だった。

(ここじゃあ、勇者なんて当たり前なんだよなあ……)

いい加減学園側は事前に転校生へ説明しろよ、と目の前の親友とは別の意味で嘆息。その拍子に、二年前へと意識が向かう。

それは彼の世界が一瞬で塗り変えられた日。

それは非現実と現実の折り混ざった不思議な日の始まり。

それは今は手放せなくなる新たな日常の始まり。

——尤もいくら大仰に語ったところで別に伝説とかは無いのだが。それでも彼にとって大事な思い出であった。

第一話 勇者は珍しくないらしい。確かに俺も勇者よりリアル獣人に興味そそ

世界つてのは不思議で満ち溢れていると思う。ピラミッドとかモアイだとか驚異の螺旋階段だとか、タイムトラベルしてきた爆撃機や嵐の中に入ってそのまま消えた某国兵達、タンスに入って瞬間移動した少女等々。検索すれば掃いて捨てるぐらいある。

けれど、一番不思議なのは世界だと俺は感じた。

話は変わって親友の話へ。どうか、次の言葉を聞いて頭を疑った
りしないほしい。いいか、絶対だぞ？

……俺の親友はある日突然消えたと思ったら、それから少し経って唐突に帰ってきた。俺の部屋に、比喻じゃなくいきなり現れた。しかも美少女三人のオマケ付き。

話を聞けばことは違う別の世界で勇者やって魔王倒して世界救ってきました、と。理解力と適応力に定評のある俺は魔法を見せて貰った時点でそれを信じた。手品かとも思ったがそこは一緒に現れた謎の少女達に一旦退室してもらい、素っ裸でもう一回やらせたから間違いはない。種も仕掛けもなかった。

まあその後ちよつと大変だったんだわ。黒服のいかにもな人達に意識を奪われ拉致、気が付けばほらいつもの自宅ではなく広くていろいろ飾ってある知らない場所で目の前には部屋とは似付かない小学校低学年ぐらいの少女がソファーに深く座っていた。

まずにその少女は学園長だと述べ、自分の持つ学園へ通わないかと言ってきた。俺としては手荒な歓迎について文句を言いたかったが、それを口に出す勇気はなかった。けど断ったらどうなるのかと聞いて微笑んだ少女を見て、話を断る勇気はもつとなかった。

そして気になったのよ俺は。人を問答無用で拉致って半強制的に編入させるってんじゃあ……ねえ？ どんなどこなのか覚悟を決める意味でも聞かなきゃならない。

「そうじゃな……異世界から迷い込んできた者やそこから帰ってきた者、後は地球にいながら魔法を行使する者達の集まる場所、じゃよ。でなきゃお主を連れて来る訳がない」

ここでようやく冒頭に戻る。少女（自称学園長）の話丸飲みにするなら一つの学園を作る程ファンタジーな人間がいるってことになる。少なくとも俺は実際に別の世界があるとか魔法は実在するとか聞いた事は無い。周りでも聞いた事はないしネットでもそんな話は書いてなかったから大多数の人間は気付いてなさそうだし。いやあ、世界って不思議だよねえ……。しかしそうなると不思議が一つ。

「でも俺は魔法に目覚めてませんし、ましてや異世界行った事なんてありませんが？」

切り札、と言うには烏滸がましい抵抗。俺は絶対に通いたくない。魔法なんて確かに憧れるが実際は危険極まり無いじゃないか。火球を飛ばすだとか雷を走らせるだとか人の脆い体に当たったなんて考えるとぞつとする。だからもしかしたらと希望をかけたんだが……

「本来ならば、の。じゃがお主は帰還してきた瞬間と異世界人を実際に見てしまっておる。」

残念じゃがと台詞を締めくくって目を伏せた少女はしかし次の瞬間にはこちらをしっかりと見て再度俺に問うた。

「この島の学園に通わないか。」

異世界人は気難しい奴もいるが基本良い奴ばかりだから心配はないからと。

「ごくりと飲み込んだ唾がやけに引つかかる。どうしようかと数瞬迷った後に、答えを出した。」

「俺は……」

「東堂 実です。ただ親友が異世界から帰還した瞬間を見ただけで連れてこられました。魔法は使えないでよろしくお願いします」

それから数日。少女（自称以下略）の笑顔を思い出した俺は自己保身のために顔かざるを得なかった。命を大事に、はRPGの作戦コマンドにある程大事なことなのだ。しかし挨拶が少し無愛想になつてしまった気がする。とは言え、普通とは違う学校なのだから何を言ったら良いのか検討もつかない。ざわざわとにわかになるさくなつた教室ではあるが、すぐに担任の先生によって静けさを取り戻す。

「はいはい、お喋りは後で後で！ じゃあ実君はもう一人の転校生の後ろ、かな？」

「気でも遣つてくれたのだろうか、窓から数えて二列目の最後尾を指して……指して……」

「あ、あの」

「何かな？」

「なんか、俺の前に座ってる人が屍になってる気がするんですが……まさかあれ、信濃じゃあないですよね？」

机につつぶし、負のオーラを纏ってぴくりとも動いていない。何をしたらそうなるのか、気になる程の落ち込み様。何人かの生徒は憐憫の視線を向けているが、いかんせんどんよりし過ぎて声をかけるのに躊躇いが生じている、ってところか。

「あれは……一種の洗礼みたいなもの、かしら。他の人に聞けばわかると思うわ」

決まり悪そうに答える先生の表情には何とも言えないモノが浮かんでいて、今まで何度も見てきたのだと容易に推測出来た。あれに、声かけるのは流石の俺も出来ないから他の人に聞いてみるか。

とりあえず自己紹介は終わっていたし、ずっと前にいて視線を集めたくはなかったのととりあえず示された席へ向かい着席。詰まっていた息を盛大に吐き出した。

しかし嫌だ。何がって目の前の親友がだ。暗い、暗すぎる。自己紹介に失敗したとしてもこの落ち込み様は視界に入れたくない。

どうするか悩んでいたところでホームルームは終了。そして転校生のお約束と言うべきか、クラスの間（？）が数割程俺に向かってきた。クエスチョンマークが付くのは仕様だ。だって中には顔が思いつきり虎の人がいたもん。いや本当にビビった。迫力に圧されて若干後ずさりしてしまったが虎のお方は笑いながら背中を叩いて

くれた。かなり痛かったが悪い人（？）ではないのだろう。

「少し聞きたいのだけど……」

「うん、何かな？」

そして今話しているのは虎のお方ではなく俺の右隣に座る尻尾と耳が特徴的な背の高い女の人。確か名前はネロ、だっただけ。薄茶の髪はさらつと腰まで伸びており、凜々しい顔が印象的。彼女のすぐ横の窓には彼女が使うのであろう大太刀と言うべき刀が立てかけられていた。銃刀法って知ってますか？ と聞きたいが片言でジュートーホー？ 等と聞き返されたらと思うと怖くて聞けない。

「いえ、俺の親友が何であんなになつてたのか気になつたもので」

「？ ああ、不破^{ふわ} 信濃^{しなの}の事か」

不破 信濃。俺の親友の名にして異世界アーなんとかの英雄の名前。召喚された彼は二つ返事で魔王討伐を了承し、ハーレムを築きつつ旅を続けその果てに魔王を討つて世に安息をもたらしたと言つ……。

そんな英雄が、どうしてあんなになつているのか。非常に気になつたがネロさんは事も無さ気に答えた。

「簡単さ。彼が壇上で勇者なんて言ってしまったからさ」

はい……？

「考えてさ。この学校はどんなところだい？」

「どんなって……」

人種や次元の壁を越えて異世界人や魔法に目覚めちゃった人達を集めた場所だろ？ 後は異世界に行っただけど戻ってきた人とか。

「うん、まさしくその通りだね。はてさて、異世界召喚されて戻ってきたこの世界の人と言うのは少ないけれど両手で数えられないくらいは居てね？」

「……つまり、勇者は珍しくない、と？」

その通りさ、と得意そうに言う彼女に納得した。そういやそうだよなあと。それに異世界人自体が勇者や英雄の類かもしれない。どうやらこの学園に限っては勇者など普遍的肩書きなのかもしれない。心中察するよ信濃。

南無南無と合掌した俺は再びネロさんに視線を移す。現代の若者に良くある猫背などではなく、ぴしっと背筋を伸ばして座る姿は侍の一言が当てはまりそうだ。と、こちらの視線に気付いたのかまだ何かあるのかい？ とこちらを向いた首を傾けたネロさんに慌てて視線を外す。

「ふむ、東堂は視姦が趣味なのかな？」

「断じてちげえ！」

ぼそり、と呟くそれは恐ろしい一言。止めてください俺に変態のレッテルが貼られちゃいます。初日でそれはマジ勘弁。

「それにしても情熱的な視線だったじゃあないか。どこを見ていたんだい？」

「尻尾と耳、ですね。獣人だなんて空想上の人種でしたから」

何やら視て辱める的な扱いを俺がしていたと、自身の肩を抱きながら悪戯っぽく笑うネロさんに突っ込み気力すら起きない。突っ込み役だつてたまにはストライキとかしたくなるんだよ。

「ふふ、ここに来た地球人は皆それを言うよ。だが私程度で驚いては先が大変だよ。何せ……」

一瞬きよとん、としたネロさんだがその後すぐに自身の頭頂部にある丸みがかつた三角の耳を軽く触りながら窓の外を見ている。その目は何とというか、今から言う事に対する反応が楽しみで仕方なさそうなの……。いや、なんか凄く不安になってきた。何がいるってんだ。

「ここには魔王すらもいるのだからね」

……はい？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5679z/>

私立異世界学園

2011年12月24日01時49分発行